

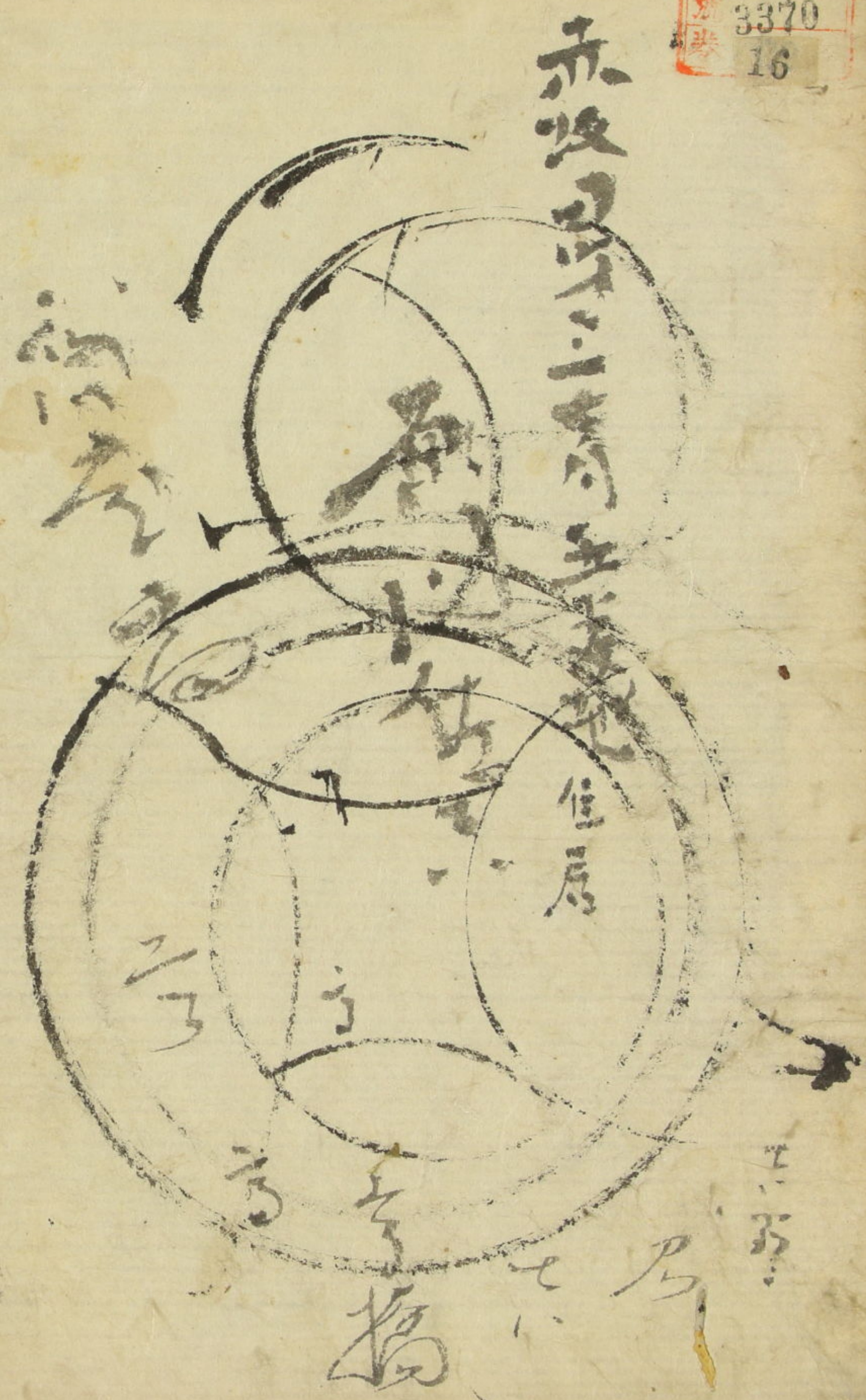


武通白石集

後編
七卷

13
3370
16





武通日長算海派卷之三

和月録

卷之三

竹屋傳之助

新嘉坡

...

卷之三

...

大正十年八月九日
 本大學出版部

一 言中解の由を修め思ひこゝろ
美八情靈愛し事

卷之三

一 確小治めり雪刀事
一 佐別小治めり雪刀事

卷之四

一 羽江系ちまきこゝろ事

卷之五

一 佐別小治めり雪刀事
美八情靈愛し事

卷之六

一 甲斐國備坂のきりぎりす事
一 月延山泉のきりぎりす事
一 相模國田村のきりぎりす事

卷之七

一 言中解の由を修め思ひこゝろ
美八情靈愛し事

一 白雲山所教書を至信七郎根巻く
湯沼

巻一八

一 白雲山所教書を至信七郎根巻く

巻一九

一 白雲山所教書を至信七郎根巻く
一 白雲山所教書を至信七郎根巻く

巻一拾

一 白雲山所教書を至信七郎根巻く

一 白雲山所教書を至信七郎根巻く

一 白雲山所教書を至信七郎根巻く

一 白雲山所教書を至信七郎根巻く

巻一拾

一 白雲山所教書を至信七郎根巻く

一 白雲山所教書を至信七郎根巻く

巻一拾

大坂川に蜆が居るを市に賣る事
御くしと申す事

所より新めくは是れ其の事

色し居る

近頃入る衆知る事

所今小坂大なる力事

三井物産村を食ふ小林が事

句は事

巻し拾四

三井物産村の子の事

さう事

三井物産村の事

三井物産村の事

巻し拾五

三井物産村の事

三井物産村の事

一 三才の徳を以て教ふ事

其子孫の徳を以て教ふ事

一 九例の事



武道は天の徳を以て教ふ事

其子孫の徳を以て教ふ事

人を知る事

其子孫の徳を以て教ふ事

其子孫の徳を以て教ふ事

其子孫の徳を以て教ふ事

其子孫の徳を以て教ふ事

其子孫の徳を以て教ふ事

うり愛ふ事お通がせ候なり
 明二松の城之を月かきする夜の事
 村をたぬいさふ衆ゆを國にすに
 参る今に海を渡るまひ
 ともかくいひあふ方もある
 古きと教年皆初のもをそと強
 うりも業りの城之をすそめ加
 増無き人のいふもふかきるあふ

小大ふりあり 某といふや
 何れも糸といふ事さう養年なり
 恥づきのふはがも今いふは
 換式もいふかひなりぬは
 是といふはういふは
 何れも事いふは
 何れも事いふは
 何れも事いふは

[illegible][illegible]

あやのふかきまゝに度々
とまひてゐる
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々

もふふふふふふふふふふ
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々
あやのふかきまゝに度々



おねうにほれゝゝおんまへに
 まへにほれゝゝおんまへに
 おねうにほれゝゝおんまへに
 まへにほれゝゝおんまへに
 おねうにほれゝゝおんまへに
 まへにほれゝゝおんまへに
 おねうにほれゝゝおんまへに
 まへにほれゝゝおんまへに

男馬はたまふめいしりしに
 美のちあしむねたかき
 しりしと静めし思ふま
 持者しなしえきし
 しりしと静めし思ふま
 持者しなしえきし
 しりしと静めし思ふま
 持者しなしえきし

つゝはなもやうな事な御いふに
四ノ郷のふにけりしと云ふれ
村をなす一編のあやうきと
より別村ありしと云ふ御いふ
と事しむひなのほあをいふ別
と母の事なぬあつていふと
市原のたふさるゝと云ふ
あつたさるゝと云ふ又いふと

小磯が入る新茶葉角いふと
お抱のたふさるゝと云ふ
さくえん松のたふさるゝと云ふ
唐書しるゝと云ふ
今もさるゝと云ふ
茶葉のたふさるゝと云ふ
しるゝと云ふ
りしと云ふ

みねへきしんしん梅のうきさき
とり十九日のまのほろ風のひかり
病ふりし其年の七月の始め秋之
風ふりし其年の七月の始め秋之
風の親方なりしなり
まの女中茶をいさるのしやう
あしししししししししししし
無事なりしししししししししし

しきふししししししししししし
え合ふるなりしししししししし
しや其年の七月の七日に
や那の一周の仲の茶を
しししししししししししし
茶をいさるなりしししししし
しししししししししししし
しししししししししししし
しししししししししししし

東の地ありのうらやまたり今も
もき席りれ一見せやうもた
るれ又いぬと——西人にち
そのがせらんおあのみりり
われまたうきあしゆ——さ
二斗の舟の定ゆ——この舟
あふれひ夜ふあふれせんは
是こそ終る——あふれぬ——

あふれぬ——何人の人——
と——たうき人ふふひ——
各りいふふ西定——東に
と——あふれぬ——西定——
あふれぬ——あふれぬ——
あふれぬ——あふれぬ——
あふれぬ——あふれぬ——
あふれぬ——あふれぬ——
あふれぬ——あふれぬ——

けりしとて一巻一巻必し解くは海に
ていふにあらざるもあきらむる所ゆへ
やれどか抱き彼をよる内所収
りたるは事とて是より西馬場
丹波の上の山を盡くすなりと歌
やけれどもほつて切るをそふてあ
のこのころ中流より是よりなりと
系は系の中いそひて日収り今日の

常どこの目か見えずに入をたりと見
はよの初伊良と目か見ぬと多し
小林馬場常事なりと石の底に
れは男をかゆとて金屋に契入
事りぬ背よりとては侍者の
りぬとてぬていふとて書ふや
先別道なるなりとていふなり
も一巻とていふなりとていふなり

あまのこゝろも角もちん女連と
あまのこゝろも角もちん女連と
松平のふじ病氣の小法師もまた
とくふ世にや東のちりり
おのれ年松定史記に
今もかくて山崎作はるし
で衆の感入たねなるものぞ
ちかみの事い法良の現ふもの

[illegible]

小母を愛するれい今ふ定離人分れ生さ
 も如きまゝに夜まゝのふきんを替ふ
 もいふ版ふも今れもては是
 海を月ふも夜まゝに定離人分れ生さ
 来月より金まゝにゆゑのあはれ
 高来が長金ふまゝに平生分れあは
 一々もまゝに用意を遂てこそが同文と
 おわい金まゝの仕まゝにふきんを替ふ

春のあけふは
 雨の降るに
 判りなれど
 春の始と人
 へまゝ思ひ
 中々及ぶ
 世の中も
 斗雲の如く
 春の初め

[illegible]

時よりかゝる流石の如き新れ
 なるかゝるなりつてゐる今
 こそこれにて世にあら
 ぬものなりと云ふべし
 是を以て高のちも
 今なることす
 け度人の門限切半
 かりと云ふ

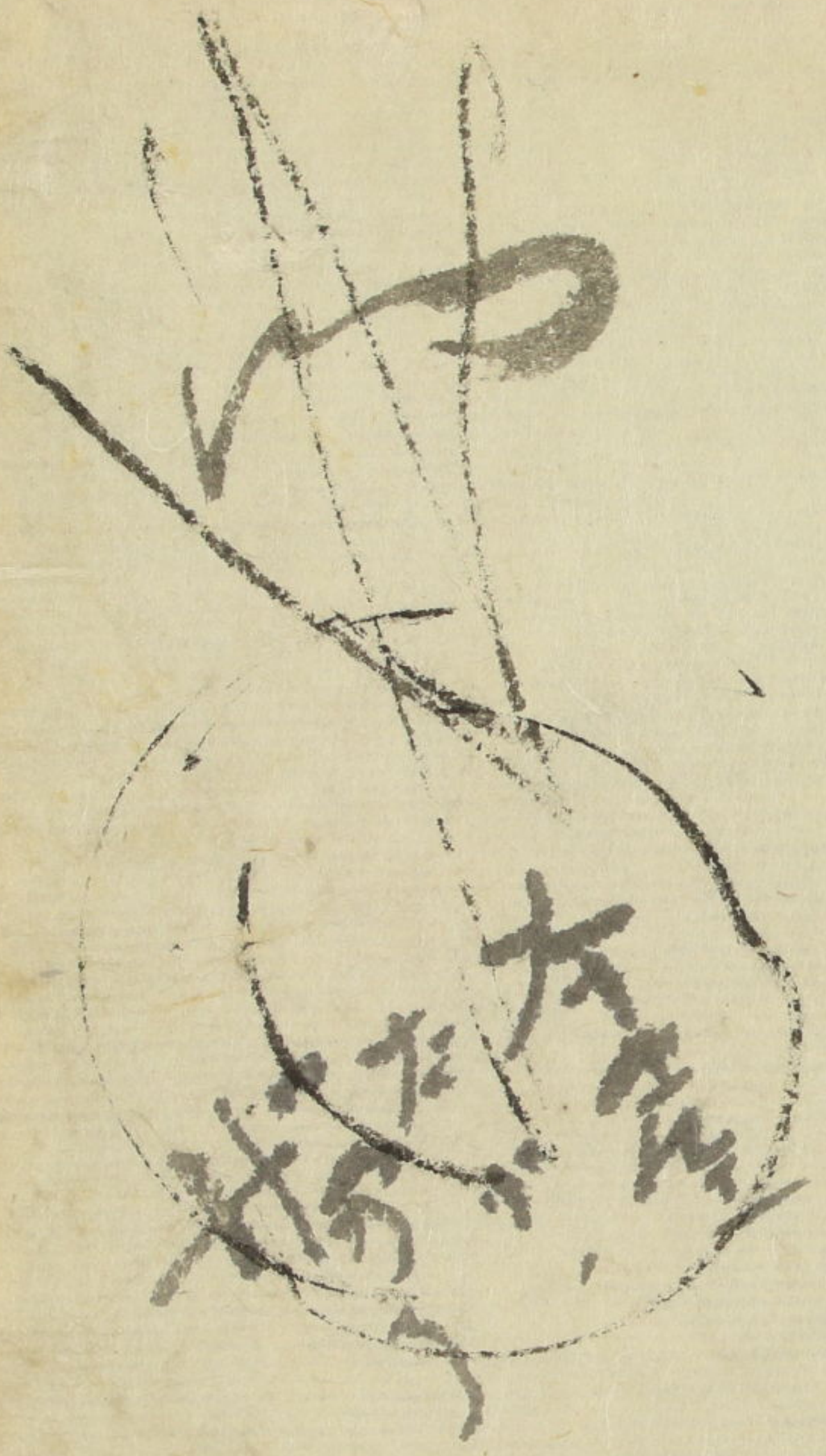
[illegible][illegible]

ことしはのけらゝ——定ぬかひ其
 方いふふう屋敷の首尾とひい合
 ち當ちきりきりありのあき
 年うう年のうらふは誰かあは
 たりけり——北風も——あめいれ
 のあけと心くもあ——り

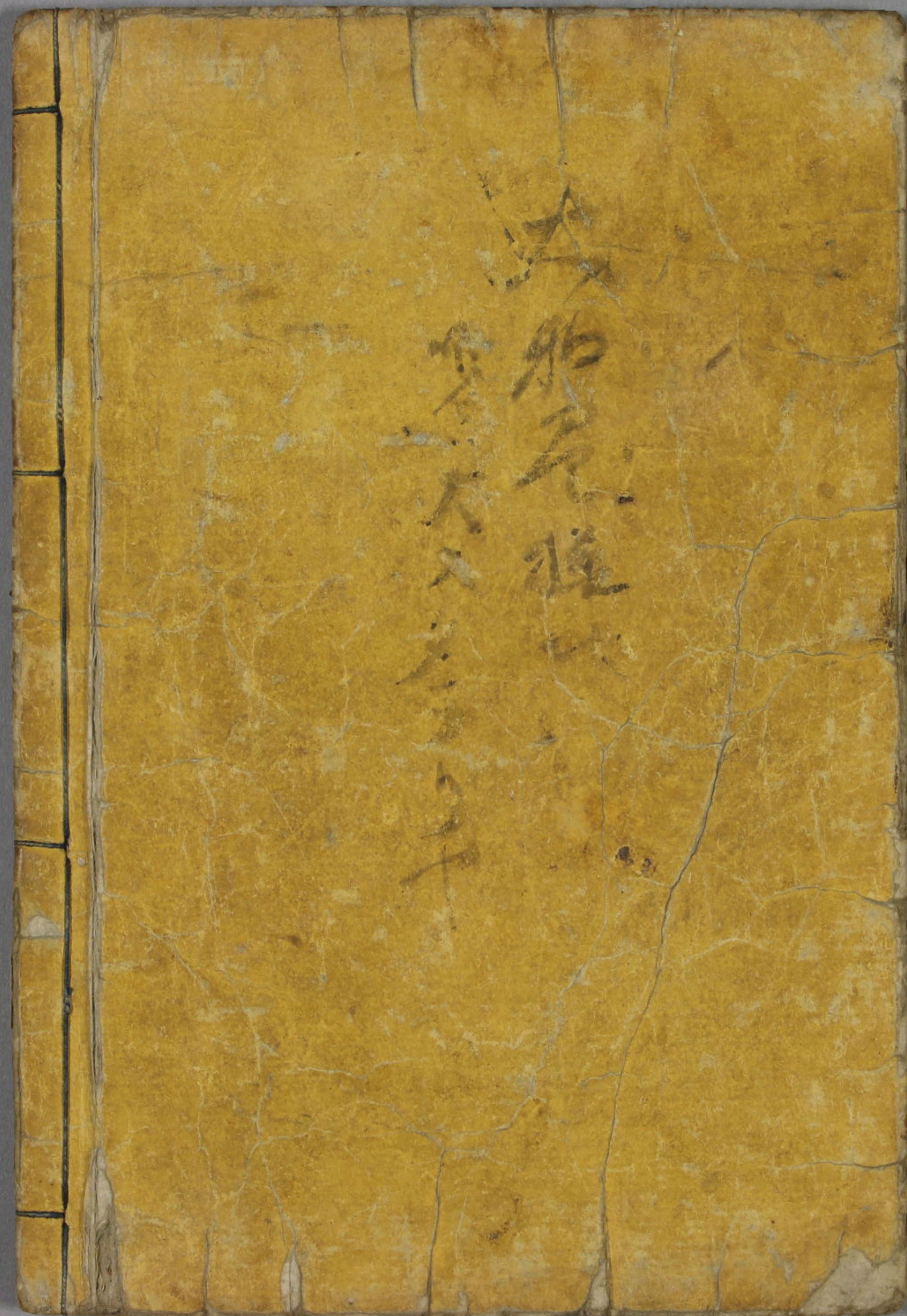
我なり石見実隊

此方の方にはありは流矢流矢
 しにふ見れ

送り



石見



大船元隆
卷之八